

# 猫ウイルス性鼻気管炎

*FVR:Feline Viral Rhinotracheitis*

猫には俗に言う「猫風邪」とよばれる病気が存在します。これはいくつかのウイルスや細菌などが単独あるいは複数感染することにより起こります。正式には猫の呼吸器病症状候群とか上部気道感染症候群などと呼ばれ、人間で言ういわゆる「感冒：風邪」と同じと考えていただければと思います。この症候群の中の一つで最も大きな原因がこの猫ウイルス性鼻気管炎です。この病気は猫カリシウイルス感染症と混合感染することが多いようです。

## 原因

原因は猫ヘルペスウイルスの感染です。感染は病猫との直接的な接触や飼育者の手や食器などを通じた間接的な接触と考えられます。このウイルスは猫科の動物のみに感染します。

## 症状

潜伏期は2～17日程度です。感染するとくしゃみ、咳、鼻水、40度以上の発熱が2～7日間続きます。始め鼻水や目やにがでて、症状が進行すると鼻水や目やにはますます増え、口内炎、涎を流す、結膜炎や結膜浮腫が見られることもあり、苦しそうに口を開けて呼吸する猫もいます。食欲は無くなり、脱水がすすみ、最悪の場合肺炎を起こします。

猫白血病ウイルスや猫免疫不全ウイルスに感染していると症状はさらに重篤になることがあります。



## 診断法

動物病院では、一般的に、ワクチン接種の有無などの問診、視診を行い仮診断して治療を始めます。一般状態を知るために各種検査が必要になることもあります。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

## 治療法

今のところ猫ヘルペスウイルスを殺せる薬はありません。一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、解熱剤、抗炎症剤、せき止、症状にあわせて

点滴や栄養剤の投与、点眼剤や点鼻剤の投与などの対症療法を行います。また、インターフェロンが用いられることもあります。

早期に治療を開始すれば死亡率が高くなることはさほどありませんが、ワクチン未接種の幼猫や老猫は肺炎を併発して死に至るケースもあります。

この病気の場合、回復しても数年間、慢性的な鼻炎や副鼻腔炎に悩まされることがあります。

## 自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した猫は特に大量の猫ヘルペスウイルスを排出しますので、他の猫への感染に十分注意してください。排泄物や食器、敷物などは焼却処分。あるいは消毒剤（次亜塩素酸ソーダ、逆性石鹼、アルコールなど）でよく消毒します。

退院（この病気の場合、病院によっては入院治療を行わないところもあります）あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬はきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整え、汚物などはこまめに処理して清潔な環境を保つことが重要です。動物病院には液体やペースト状の栄養剤などもありますので、食欲がない時には主治医の先生に相談してこれらを処方してもらおうといでしょう。

## 予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。猫ヘルペスウイルスが猫の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。あるいは、仮に発病しても軽症ですみます。猫汎白血球減少症、猫カリシウイルス感染症との3種混合ワクチンは必ず接種しましょう。

## メモ

この病気は伝染性が強いのでワクチンを接種していないとペットホテルや動物病院での預かりや入院ができないところがほとんどです。仔猫が生まれたら、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。

猫の咳は魚を給仕している飼育者の方が「骨がひっかかっているようだ」という理由で病院につれてこられることがありますが、本当に骨がひっかかっていることは非常に稀で、咳の症状がそのように見えることがほとんどです。